

情報共有

(6枚)

非管理メモ

MISA班 ← プレス対応

10/30 12:30 / 10/30

東京電力株式会社

飯塚 関野

暫定版

プラント状況（本店レク）議事メモ

日時：平成23年10月29日（土）18:00～19:30

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約25名（カメラ3台）

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について（第二百十八報）
- ・ 福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について（第二百十一報）
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析結果について（10月28日採取分）
- ・ 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について（10月28日採取分）
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・ 大型クレーン解体作業時の発災状況
- ・ 【スライド】福島第一原子力発電所 放射性滞留水の回収・処理の取組み～水処理（放射能除去）の仕組み～

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 重傷の作業員の福島県立医大での診断結果は。命に別状はないのか。

A. 詳細な診断結果はまだ出ていない。

Q. 発災状況は、台座ごとワイヤーが落ちたのではなく、ワイヤーだけ落ちたとの認識でよいのか。

A. その通り。

Q. 巻き取っていたワイヤーを固定する番線が何らかの理由で外れたのか。

A. 台座にワイヤーを載せ、番線で固定していた状況であり、その番線が切れたか、あるいは外れたことによってワイヤーが落下した。

Q. 台座とワイヤーは接着しているものか。

A. 載せているような状況である。

Q. 作業状況として配布資料の真上から見た図によると、作業員は箱マストに位置し、クレーンの台座の真下にいたのか。

A. 箱マストから見ると、積荷の真下の位置ではないと考えている。ワイヤーをどのようなルートで下ろそうとし、負傷した作業員がその際どの位置にいたのかは確認中である。

Q. 配布資料の図に台座は載っていないのか。

A. 載っていない。

Q. 事故原因を今後どのように調査するのか。調査の主体はどうなるのか。

A. 基本的に元請け企業が作業員の聞き取り調査を実施する。当社としても、適宜調査したいと考えている。

Q. 34名の作業員のうち、協力企業別の内訳は。

A. 確認したい。

Q. 事故報告を元請け企業からどのような形で受け取るのか。

A. 基本的には元請け企業が調査するので、当社としては必要に応じて作業員に対して事情を聞きたいと考えている。

Q. 重傷の40代作業員の顎の骨折をどう捉えたらよいのか。

A. そのあたりの状況は不明である。顎、右腕、肋骨、両足の脛を骨折しているため、下敷きに近いか、ワイヤーが正面から落ちたのか等についてはまだ確認できていない。

Q. 被災直後、重傷の40代作業員は動けなかったのか。

A. その通り。

Q. まわりの作業員がひとまず救出したという形か。

A. 事故状況はまだ確認できていない。

Q. ワイヤーが落下したとき、そばにいた20代作業員による事故状況の説明はないのか。

A. 当社として正式には聞いていない状況である。

Q. 番線が切れたか外れたことによる事故だが、見た目ではわからなかったのか。

A. まだ調査中である。番線そのものが原因なのか、吊り方に問題があったのか等に関して調査中である。

Q. 今回の事故は労災の対象になるのか。

A. 作業中の事故であるので、対象になると考えている。

Q. 1号機の炉注水量を5.5m³に増やして、さらに1m³増やすのはなぜか。

A. 現在、1号機が一番冷却が進んでいる。格納容器の中は、飽和水蒸気と窒素が充満

している。水が蒸発している状況に変わりはないため、水の蒸発量を低減させることで、格納容器から放出される放射性物質もさらに低減させたいと考えている。2号機は約10m³、3号機は約11m³で注水しており、1号機も注水量を増やすことで、放射性物質の放出を抑制が図られると考えている。最終的には、7.5m³まで増加させる予定である。

Q. 水蒸気が凝縮すると、水素爆発のおそれはないのか。

A. 急激に冷えることに関しては懸念している。注水量を増やすことで格納容器が急激に冷えて水蒸気が凝縮してしまうと、格納容器が分厚くなりまわりの空気を吸い込む形になり、酸素が高圧になることが懸念される。今回は、徐々に冷却を進めていき、飽和蒸気を維持しながら冷却を進めるということから、酸素濃度が高まるおそれはないと考えている。

Q. 水処理の仕組みに関して、スラッジ貯蔵施設のセル室はプロセス主建屋の地下の別部屋という認識でよいか。

A. 屋外にスラッジ貯蔵施設として、土に埋めるような形で貯蔵タンクを置くようになっている。

Q. セル室とプロセス主建屋は隣接しているのか。

A. プロセス主建屋から南100mの位置にある。

Q. 10月25日時点で約580m³の廃スラッジが貯蔵されているが、貯蔵上限の容量は。

A. 800m³である。

Q. 現状のペースで貯蔵していくと、どのくらいの期間で満杯になるのか。

A. アレバの除染装置に関しては当面待機状態を維持するので、580m³から増えない予定である。キュリオン、サリーが万一不調に陥りアレバを動かした際に、増える可能性が出てくる。

Q. 貯槽内部の廃棄物は、相当線量が高いと認識しているが、移送はどのように実施するのか。

A. ポンプで汲み上げることで実施する。移送用のホース・ポンプは既に設置済みである。

Q. 海外の研究者・研究期間が、大気中・海洋中に放出された放射性物質に関して、見積もりとしてもっと多いのではないかとの研究結果を出しているが、東電として改めて放出量を算出し直すことや妥当性を検討することはあるのか。

A. 様々な研究結果が公表されていることは承知している。元になったデータやどんなデータを使っているかまで承知していないため、妥当性等に関してコメントが難しい。最終的に大気中にどれほどの放射性物質が放出されたのかに関しては、正確な評価ができていない。課題と認識しており、現在検討中である。原子力安全・保安院と原子力安全委員会は既に公表しているが、当社も公表していきたいと考えている。海洋中に出た放射性物質の量に関してだが、2・3号機で高濃度汚染水を漏出させたこと、

4月初旬に集中廃棄物処理建屋と5・6号機のサブドレン水を約1万トン排出したことによるが、こちらに関しては評価が終わり、以前公表した通りである。今回フランスで計算した結果として20～30倍で報道されているが、当社は大気に拡散したものが海洋中に落ちたところまで評価できていないため、その差だと考えている。しかし、依然として分析・評価までは至っていない。

Q. 改めて東電として研究機関等の発表内容を評価しないのか。

A. 別の評価の妥当性を検討するのではなく、当社として再度分析・評価する予定である。

Q. 現在、サリー・キュリオンの並列運転だが、今後、サリー単独運転になることはないのか。

A. 現在、1号機のタービン建屋から2号機に滞留水を移送してまとめて処理している。また、2号機からプロセス主建屋、3号機から雑固体廃棄物減容処理建屋へ移送して除染処理をしていることから、当面はキュリオンとサリーの並列運転を継続する予定である。

Q. 放射性物質対策として新たに設置している設備はあるのか。

A. 新たな処理装置については検討を進めている。現在、処理後の水は $10^0 \sim 10^1$ まで放射性物質が低減されているが、環境に漏出すると影響のあるレベルであることから、さらなる放射性物質の低減をはかるべく新たな装置を検討している。

Q. どのようなものを検討しているのか。

A. ゼオライトに吸着させるか、沈殿させるかの方法しかなく、あまり種類があるわけではない。水中の濃度限度を下回ることを目標としている。

Q. 5・6号機の滞留水のレベルまで下げて散水することも視野に入れているのか。

A. どのような処分をするかについては現状未定。

Q. 34名の作業員の健康調査を作業前に行っているのか。

A. 朝のミーティングの際に作業班長から聞き取ることになっている。

Q. その日の健康状態を紙に書いて管理することにはなっていないのか。

A. 元請けによってはそのような対応を実施しているところもあるかと思う。

Q. 10月27日の午前中に体調を崩した方の診断結果は。

A. 個人的な病気であり、病名については回答を差し控えさせていただきたい。

Q. 当該作業員は、1号機タービン建屋内でケーブルの敷設作業をしていて体調を崩したとのことだが、27日のみ線量の高い領域で作業をしていたとの説明を受けた。同じ建物の中でも場所によっては線量に違いがあるのか。

A. 27日だけ線量の高い場所で作業していたのかについては確認できていない。なお、

同じタービン建屋でも空間線量が高いエリアがある。

Q. 企業倫理相談窓口の連絡先をJビレッジの掲示板に掲載したのか。また、安全推進連絡会を通じての安全対策の周知徹底は図られているか。

A. 現在確認中。

Q. 大型クレーンの解体はいつから実施していたのか。

A. 10月24日から。

Q. 解体中のものが750トンクレーンだが、それ以外に2基のクレーンを使っているのか。

A. その通り。

Q. 水処理説明資料においてプロセス主建屋の滞留水が今後増加するような記載になっている。なぜか。

A. 今後、タービン建屋の滞留水を基本的にプロセス主建屋で受けることを考えている。

Q. 1号機の注水量を増やすことにより、タービン建屋の水量が増えるかと思うが影響は出ないのか。

A. 来週水曜日の週報に加算された水量が反映される。日量150トン程度であり、水処理に影響を与えるものではない。

Q. 水処理は最終的にどのようにするつもりか。いつまでもOP3,000mmで維持するつもりなのか。

A. 最終的な目標としては、原子炉格納容器の滞留水を圧力容器に戻すコンパクトな循環ループを考えている。そのためには、建屋の止水が必要となってくるが、難しい作業のため、現時点では見通しはない。

Q. 地下水が漏れ込んでくる等、滞留水が増える要素があるが、貯蔵スペースなどの確保は当面可能なのか。

A. 当面は1ヶ月に20,000t分ずつタンクの設置を続けているので、年末までは問題無い。ただし、中長期的に続けられるかは見通しがたっていないため、他のプロジェクトの進捗状況と併せて検討してまいりたい。

Q. 冬場の対策は何か考えているのか。

A. インフルエンザ対策が中心。作業員の予防措置をお願いしているが、作業員の方への予防接種を無料で実施することとしている。屋外に引き回している配管の凍結が心配になることから、防温材等を設置してまいりたい。

Q. 廃炉にするにあたって、原子力委員会の案としては水冠状態にして内部にテレビカメラを入れるというものがあるらしいが、東電として水冠に対する見解は。

A. 水冠については、短期的に行えるものではないと考えている。現在、格納容器から

原子炉建屋に水が漏れているので、止水する事がこのプロジェクトの必要条件だと思っている。高線量下での作業であるため、沿革操作可能なロボットの開発が必要である。

Q. 東京電力として水冠にする考えはあるのか

A. 損傷燃料を取り出すためには圧力容器を水に浸けておく必要があるので、格納容器も含めて水冠にする必要がある。

Q. メルトスルーの可能性があるので、そのような作業が行えるのか。

A. 格納容器内の漏洩箇所を見つけ塞ぐことが必要であり、難しい作業だとは思いますが、遠隔操作のロボット等により達成したいと考えている。

Q. 電気予報はいつまで発表するのか。また、今冬も節電のお願いをするのか。

A. 電気予報は当面続ける予定。今冬の電力需給の見通しについては、近々公表する。

Q. ある学者が東通原子力発電所の敷地内にも断層があるという発表をしているが、東京電力としての見解は。

A. 当社としても地質調査を行ってきおり、保安院にも設置許可の認可が出ているので問題ないと考えている。様々な知見が出る度に見直す必要はあるかと思う。

Q. 発電所からの放射性物質の放出量の推定について、原子力安全委員会のようにモニタリングポストでのサンプリング値から推定するのか、原子力安全・保安院のように格納容器内の状況を調査し、そこから推定するのか。

A. 現時点で双方の側面から行っている。

Q. 外れた番線を縛る作業は、本で行われたのか。

A. いつ番線で固縛したかは確認できていない。

Q. 番線は繰り返し再利用しているのか。

A. 現時点では確認できていない。

Q. インベントリからどれくらい放出したかについての結果は既にMAAPで出ていたと思うが、なぜ放出量の評価に時間がかかるのか。

A. MAAPは原子燃料から漏れて格納容器にどの程度移行したかについては評価されているが、格納容器から建屋・大気にどれくらい移行したかは評価できていない。

以上